



**NO. 24** 1996. 11  
 (株)九州地域計画研究所

NETWORK

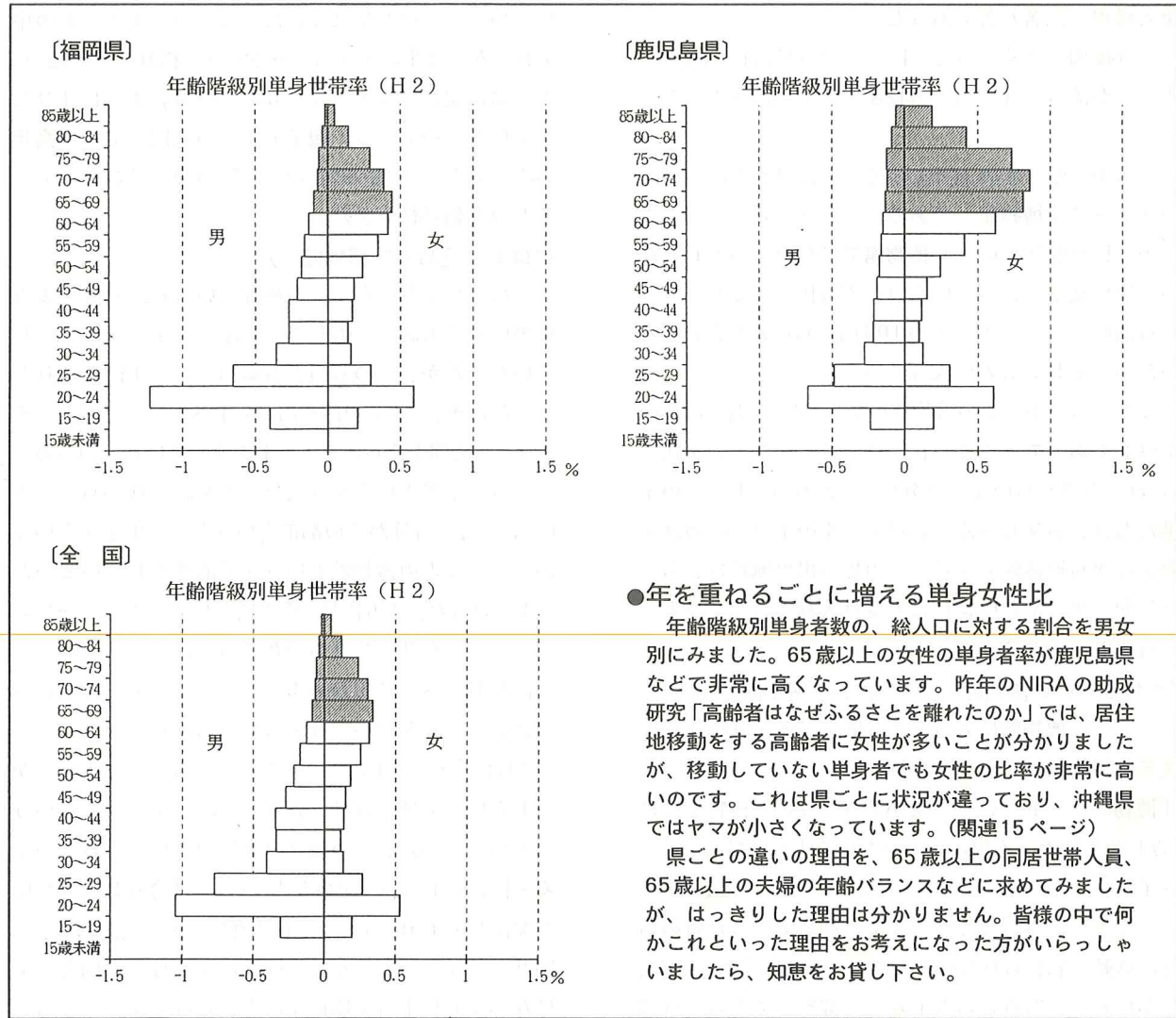
博物館ってなんだシリーズ①  
 博物館が「博物館行き」と言われないために ..... 2  
 山歩きの格好で行く博物館  
 ～大阪府立近つ飛鳥博物館の見学より～ ..... 4  
 「貧乏見たけりゃ猿払へいきな」と言われた村がホタテの稚貝  
 放流で、豊かなオホーツク地域づくりのリーダーになった ..... 5  
 若者にカツを入れるには絶好の場所と思った  
 ～アメリカ・シリコンバレー視察報告 ..... 10  
 福岡県グラウンドワークトラスト準備中  
 ～「花の輪 人の和 地域のり」 ..... 13  
 地域データ散歩  
 年齢階層でみた男女別の単身世帯 ..... 15

見・聞・食

人にやさしいだけでないヨーロッパ ..... 18  
 楽しく遊べる露天風呂と単に屋根のないだけの露天風呂 ..... 20  
 「目黒のサンマ」か「出水のいわし」 ..... 21

近況

会津大学マルチメディアセンターを見てきました ..... 22



## 博物館ってなんだ シリーズ①

## 博物館が“博物館行き”にならないために

## 〈博物館行きと言われる博物館〉

九州の太宰府に国立博物館ができることになっている。テーマは「アジア文明交流史博物館」ということで、その利用などのことを考えるために、少し手伝いをさせていただくことになり、その勉強のために博物館を廻ってみた。

そのとっかかりに各地の友人に連絡を取ってみたところ、博物館をつくることは大流行だということがわかった。ところが、そのいくつかを廻ってみると、どこも入場者が少なかったり減少気味だったりして、入場者獲得に四苦八苦であった。

一寸皮肉っぽく言うと、「つくるのは流行っていて、入るのが流行らないのが博物館」とでも言うところである。

その中で唯一客の入っているように見えるのが横浜の「ラーメン博物館」である。これは正式にいうところの（博物館法にいう）博物館ではないのかもしれない。狭い地下に入っていくのに300円もとるし、入ったら高いラーメン（700～1100円くらい）を食わせるのだが、それでも人は入っている。

なぜ入るのか。この博物館のテーマは「昭和33年の下町」であって、ここに行けば、ベビーブーム世代は自分の10歳ぐらい頃の気分「ひたれる」し、その子供たちは、お父ちゃんやお母ちゃんの子供の頃の話聞きながら追体験できる。この思い出の風景は、もっと年配の世代や若い世代にも受け入れられる“ひとつの時代館”である。

## 〈さわっていい博物館、“ひたれる”博物館〉

ラーメン博物館に入って、大阪の“みんなく”こと民族学博物館のことを思い出した。

「博物館行き」という言葉があるように、博物館には「カビの生えた、不用になったものを入れる場所」というイメージがつきまとっている。そういった気分であったところへ、みんなくができて、初めて入った時の新鮮な感動が忘れられない。ここは、今まで「さわるな、静かにせよ、写真とるな」などと観客をできるだけ遠

ざげ、素人でない専門家だけの場としてきた態度はなかった。そこには「手にとってみて下さい。笛を吹いてもいいぞ」といった親近感があった。“みんなく”ができてもう20年になるのだが、今度行って見て、設立当時より少し観客との距離が遠のいているように思えたが、本当はどうなのだろう。

いずれにしても、固い扉やガラスの向こうにあってカビの生えていた博物館が、手にふれられる距離まで近づいて来たのはすばらしかった。

話をラーメン博物館にもどすと、ここはさらに近づいていて、その空気に「ひたれる」のである。あの中では、女子校生などがお巡りさん（の格好をした職員）と一緒に記念写真をとったりしている。まさに「ひたっている」のである。親子で、若い人同士で、中高年の人たちが、“昭和33年の風景”の中に「ひたっている」のが新鮮に見えた。

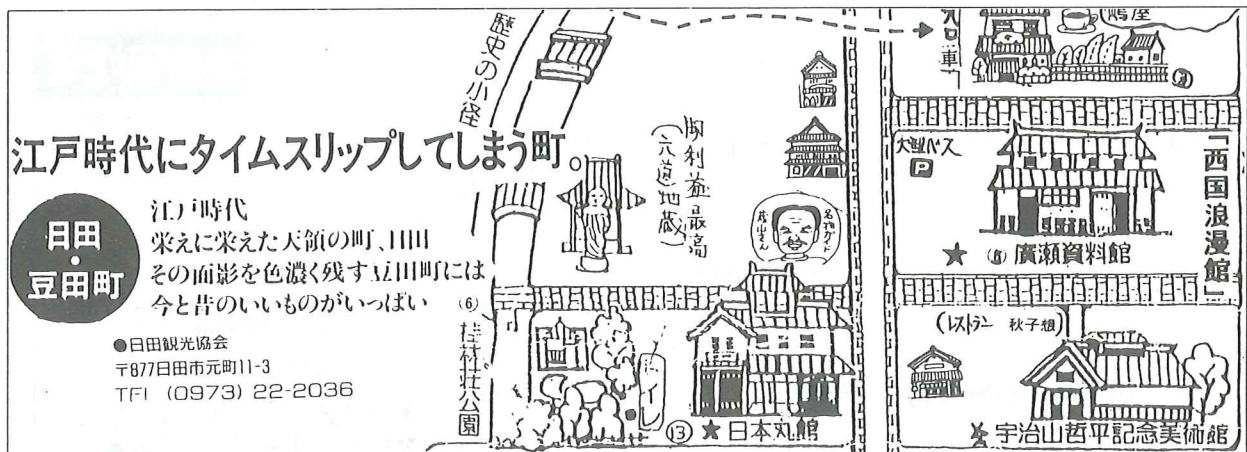
## 〈“はまり込める”博物館？〉

この夏墓参りのために南禅寺へいった。たまたま電車の中でも読むつもりで、文庫本をポケットに入れていたのだが、あの石川五右衛門云々の山門を通りかかったとき、つい250円を出して上へ上っていった。それから1時間半ぐらいそこで本を読んでいた。山の風に当たって下界とはちがう気分でも本を読みながら、ふと「これは今、自分がこの都市というか、歴史遺産というか、都市ごとの博物館というかの消費をしているのだな」と思った。250円は、喫茶店と比べてもはるかに安くて高品質なサービスの消費であった。

消費対象へ“はまり込んで”消費をしているというのは、なかなかいい気分のものであった。

9月に東京で、「これは糸乗さんが気に入ると思うから」といって地域雑誌「谷中、根津、干駄木」という本をいただいた。その雑誌の末尾の頁に「上野そのまんま博物館」という記事が出ていた。「今年は上野公園が開園して120年です。『不忍池を愛する会』では、米国リーバイ・ストラウス社の助成を受けて、開発型ではない楽しい上野公園の学び方、遊び方を模索するこ





江戸時代にタイムスリップしてしまう生きた「そのまんま博物館」  
(日田市豆田のイラストマップの一部)

とにしました。名付けて『上野そのまんま博物館』です」というお知らせが載っている。

これも“はまり込み型消費”を目指したもので、「博物館行き」のような対象化され、疎外されたものとはちがうと思う。

10月になって、東京からきた3人に「押し売り」ではない「押し買い」にあった。以前から、小鹿田（おんた）の音と風景について我がことのように威張っていたので、たった10戸の焼きものの里である小鹿田につれて行けという押し買いには、断ることはできなかった。

この小鹿田も、まさに「そのまんま博物館」である。ここは上野などよりもっと徹底していて、「江戸明治焼もの実演・実業博物館」である。少しだけ説明すると、土を近くからとってきて→集落の中の小川で水利用型の唐臼で2週間搗き→細かく砕かれた土を“とおし”でふるい→その細かい土を水に浮かべてコロイド状の土を集めて水切りをし→轆轤（ろくろ）に乗るぐらいの固さにして土作りが終わる。このあと大きいものは蹴轆轤で、小さいものは電動で成型して天日で干す。雨がパラパラと来ると家中の人が急がしく、かつ慎重に取入れる様は、昔の農村の刳干し風景と似ているが、破れものを扱うだけ一層大変である。このあと素焼きをし、さらに釉薬をぬった上で登り窯で焼く。

運がいいと、何日もかかって8段の窯がある登り窯の火を焚いている時にめぐり会ったりする。薪を入れるのを見ながら、焼もの話を聞くことが出来る。学芸員を越えた現役の職人の話だ。また、まだホカホカしている窯の中から焼ものをとり出している所に出会う

こともある。平凡な言葉だが、正に「生きている博物館」である。

小鹿田の帰りに日田市の豆田商店街へ立ちよった。酒倉があり古い住居を生かした喫茶店あり、土産物屋ありで、東京の3人の客人はかなり「はまり込んで」おられた。ここも15年前には、全くさびれてしまっていたのだが、地元の人たちのたゆみない努力で復活した街である。いずれまた、そのプロセスについては報告したいと思う。

〈新しい施設と“はまり込める”が組み合わせられないか〉

京都の南禅寺にしても、小鹿田や豆田にしても、歴史の重みがあるから「はまり込める」だけの迫力があるのかもしれない。しかし新しい施設でもそんな気分になれるような工夫はないものだろうか。

12~13年前、太宰府の都府楼跡に案内してもらったとき、磐井の墓といわれている岩戸山古墳を訪れたときと同じぐらいの感動を覚えた。そこには礎石しかなかったが、昔の風景を十分想像することができた。

アジアとの交流をテーマにするならば、鑑真の歩いた九州の道とその時代、当時の唐の風景や文化と、今日現在の西安の風景、現在の坊津の様子などを博物館で覗き見ることができれば面白い。また山田長政の時代の日本と現在のアユタヤ（タイのバンコク地方の古都）が同時にみられるなら、かなり「はまれる」かもしれない。もっと発展させて考えると、太宰府の博物館へ行けば、山田長政の時代の日本、中国、タイなどがわかると同時に、今日の今現在の天気や、人々の暮らしなどを街の人や先方の博物館の人と話ができたり

しないだろうか。「昔の日本との交流のことをそちらでは学校で教えていますか」などと質問したりできると面白い。

この程度のことは通信技術と組み合わせれば十分可能だと考えられる。

皆が「はまってしまう」博物館をつくりたいものだ。  
(糸乗 貞喜)

### 山歩きの格好で行く博物館

～大阪府立“近つ飛鳥博物館”の見学より～

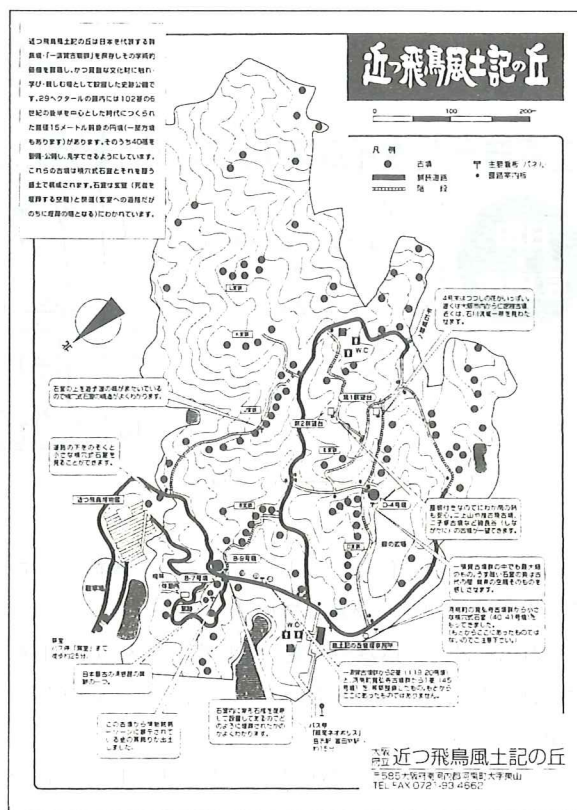
博物館や美術館は交通の便の良いところに立地し、博物館なら博物館だけがあって、展示を見るために人がそこに集まると思っていた私の考えを見事に覆すような博物館に行き、お話を伺うことができました。

#### ●『大阪府立近つ飛鳥博物館』の概要

- ①場 所：大阪市内（天王寺）より電車、バスを利用し約1時間～2時間（車の方が便利が良い）
- ②建 物：安藤忠雄の作品。地下1階、地上3階のコンクリート打ちっばなし
- ③メインテーマ：日本古代国家の形成過程と国際交流をさぐる
- ④展 示 品：古墳時代から飛鳥時代の日本古代律令国家の形成に関するもの
- ⑤館内施設：ロビー、多目的ホール、図書コーナー、相談カウンター、屋上階段広場 etc…
- ⑥他の施設：近つ飛鳥風土記の丘



本物の出土品にタダでさわることができる



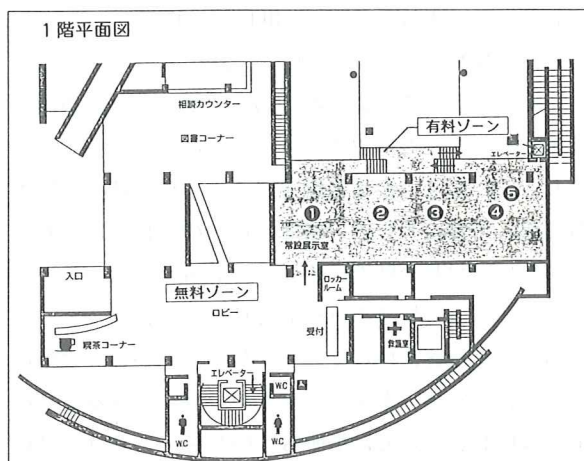
29haの風土記の丘の中に102基の円墳がある

#### ●不便なのが便利な博物館

『大阪』というところは（昨年まで実際に生活して感じていたのだが）、「何をするにも電車を利用するのが早くて便利だ」と思っていた。しかし、この博物館は大阪にありながら南河内郡河南町大字東山という車を利用する方が利口という場所にある（近くに近鉄線の駅はあるのだが…）。しかし、山一つ越えると奈良県のこの地には、膨大な数の古墳群があり、その古墳に触れて楽しむ場所として大阪府が『近つ飛鳥風土記の丘』（史跡公園）を設置している。博物館はこの公園に隣接してある。

この博物館を訪れる人々の多くは、隣接する風土記の丘で散策を楽しみ、博物館入口の無料のホール（博物館内の施設もここにある）部分で休憩したり、相談カウンターでレプリカではない本物の出土品に触ったり、図書コーナーで読書を楽しむなどしている。実際この博物館の利用者数は年間約17万人、そのうち無料ゾーン利用者が7万人と約4割の人がこの博物館を休憩場所として利用している。ここは、立地の不便さはあるが、博物館に来たお客さんと、隣接する公園施設（博物館の資料と関連した「本物の古墳」に入ったり、登





「近つ飛鳥博物館」の1階平面図、無料ゾーンが全体の約60%を占める

ったりして遊べる)のお客さんの見込める2倍おいしい、「不便なのが便利な博物館」である。

●実はもう一方からの客の流れがある  
香椎浜のNEXSしかり、百道浜しかり、熊本アート

ポリスしかり、有名建築家の建物というのは関係者のみならず人が寄る。大阪天保山にあるサントリーミュージアム(安藤忠雄史の作品)の「安藤忠雄展」に行ったときなど、観光ツアーの団体でごっちゃがえしていた。

この博物館もまた、安藤忠雄氏の作品であるから、建築関係者や建築系の学生が多いそうだ。

●近つ飛鳥博物館の魅力

1. かたち — 建物自体の魅力で人が集まる
2. 展示品 — 触れることができる
3. 無料施設 — 1Fの約3/5のスペース
4. 隣接公園 — 自然、生の古墳群
5. 周辺環境 — 隣接公園だけではなく周辺地域全体に古墳が散在している

以上のような点を感じた。今度は公園で遊びたいと思った。  
(澤谷 真紀子)

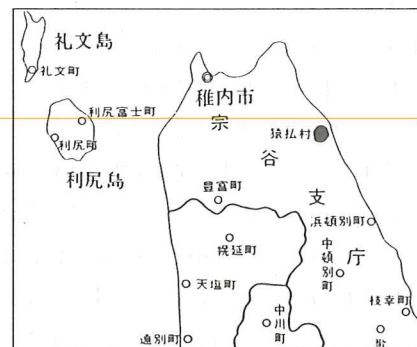
「貧乏見たけりゃ猿払へいきな」と言われた村が  
ホタテの稚貝放流で、豊かなオホーツク地域づくりのリーダーになった

(戸当たり、年間150万円の漁獲水揚げから13%の強制積み立て)

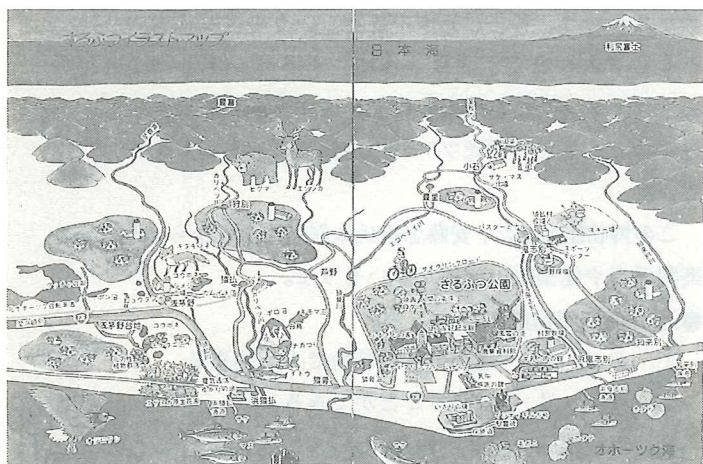
11年前、何気なしに手にした雑誌に、猿払村のホタテ貝再生の話が載っていた。年間水揚げ150万円と言っても、漁船・漁具などの修理や油代を見たら、おそらく実質所得は半分を多く越すことはなかろうと思った。その雑誌には、「天引き貯金を確実に実行するために、組合員には生活費7万円の月給制として強制積み立て」をしたと説明されていた。これが行われたのは、万博景気の昭和45年のことである。

そして10年後(昭和58年度)、稚内税務署管内の高額納税者(1000万円以上)99人の内59人が、人口3000人余の猿払村の人によって占められることになった。正に大冒険・大成功物語なのだが、海の中に稚貝を蒔くと言うような大リスクが、何故受け入れられたのか、放流した稚貝が同じ場所で成長するという「あて」があったのか等、納得のいかないことが多かった。「猿払村はかつて日本一のホタテガイの資源に恵まれていたが、乱獲がたたって資源が枯渇し、密漁でもしなきや

食べていけない日本一の貧乏村に転落してしまった。そこで試行錯誤の上実施した稚貝放流が成功し、日本一のホタテガイの生産地に蘇り」近隣漁業組合の見本となり、豊かなオホーツクのホタテガイ漁業が復活した、という物語を確かめるのが、この10年の宿題であった。その望みを、この夏果たすことができた。



猿払村(さるふつむら)  
人口3,155人(H2)、面積585.74km<sup>2</sup>、村の中を猿払川が流れているが、この川は「その源を天北山脈標高100mに発し北流して、石炭別川、ポロナイ川、濁川、狩別川などの大小の支流を合流してオホーツク海に注ぐ流域面積374.0km<sup>2</sup>、流路延長59.5kmの2級河川」と説明されている。



さるふつイラストマップ

連絡を取ってみると、私の読んだ文章を書かれた前田保仁元助役が健在であり、会って下さることになった。会ってたんたと話されることを聞きながら、貧乏も豊かさも私の想像以上だったことがわかった。ちなみに、前田さんは、甲子の生まれである。甲子園のできた年で大正13年である。丙子の私とはひとまわりちがうことになる。

漁業組合で聞いた話や旧助役の前田さんの話を、この小文で全部紹介するわけにはいかない。詳しい話は、前田さんがいろいろ書かれたものや、話されたことの記録をもらってきており、それひとつひとつが大切なものである。別に次の世代のためにとって、B6版100頁の記録もある。やむをえぬので、私の印象に深く感じたことを中心に書くことにする。

〈「村に金がない、職員に給料が払えない」とは？〉

「私をはじめ出勤した日にですね。役場に近づいてきますとね、何やら何人かが書類を縄で縛って役場の中から持ってきて、車に積んでいるんですよ、今ならさしづめ段ボール箱ということになるんでしょうが。」と、ニコニコしながら話が始めた。

前田さんが着任した昭和28年10月の朝、警察が捜査に入っていたのである。容疑は公金の横領とか着服というようなことなのだが、実態は役場に全くお金がないということと、役場の会計が開拓団の会計を受け持っていたことから起こったことである。

考えてもみていただきたい。昭和28年当時の村役場の会計担当者が開拓団の複式簿記と役所の官庁会計の区別がわかるのはかなり無理なことである。そこへもってきて、財政逼迫し、職員の給与を払うため、とにか

く目前にある開拓団の金を流用したりしているうちに、帳簿が混乱してしまったとしても笑うことはできない。

それまで北海道炭鉱汽船に勤めていて、炭鉱の原価管理をやっていた前田さんは、友人の紹介と強制のようなことによって役場の財政建て直しのため、見込まれて移ってきたのだが、帳簿がないのでは整理のしようがない。村長や助役に相談しても方法がないし、結局警察に行き、帳簿を見せてもらうことになった。ところが既に警察に持って行ってしまっていた。警察にお願いにいくと、事情はわかるが、持って帰ることはできないし、ここでは場所もない見せようわけにはいかん。結局、警察に警察から借り出してもらって、警察署で見せようことになった。毎朝5~6時頃の汽車で稚内へ行き、手書きで写し取って来るという作業から始めた（コピーはなかったのだ）。

毎日警察署に通っていると、朝8時半頃に掃除をしている民間人がいる。その人が逮捕された猿払村の出納担当者であった。そこではじめて自己紹介をし合って説明を聞いたりしてだんだん事情がわかるようになった。（いくらなんでも信じかねる？）

こういう状況だから、遅配欠配が当たり前になっていて、着任以来、全く給料がもらえないという状態だった。また役場が手当たり次第に金を借りていて返さないで、役場の職員の信用もなく、米などのツケ買いにも応じてくれなかった。

役場の職員は税金集めにいくのだが、村民も収入がないのだから払ってくれない。札幌に出張するとき、給料をもらっていないので、建て替えることもできずに、やむなく旅費をくれと助役に言うと、助役が税務課の人間を集めて、ポケットから少しずつ金を出させて、それをもって出張するというようなことだった。

この背景としては、当時地方財政はどこでも大変だった。戦後の悪性インフレを退治するため、均衡予算を組んでいたし、起債（借金）などはできず、それでいて実質的再軍備である警察予備隊をつくり、6・3制という新しい教育制度のための費用が増大していた。

その中で猿払村は、村内最大の産業である石炭業が後退し、40年代からはどんどん廃山に追い込まれていた。漁業もホタテ貝は27年頃から漁獲量が減っていたし、29年になると北海道のすべての海からニシンが消えてしまった。全国の自治体が財政的に困っているとき、産業がなく税収のない猿払村の窮状は当然とい





巨大熊手に網のついたものでホタテガイをとる

えたのかもしれない。

〈貧乏を見に来られちゃった話〉

「実は……」と見せてもらった本には、本当に「貧乏見たけりゃ猿払へ行きな……」という文字が出ていた。以下に「だきしめ北海道」という本の一部を引用してみる。

「宗谷郡猿払村というオホーツクの村、日本最北端の宗谷岬から国道238号線を海沿いに30キロほど行った、なにもない村だ。ボクが10年近くまえ初めて北海道を旅したときには、『貧乏見たけりゃ、猿払へ行きな……』という台詞をしばしば耳にした。そんなにすすめるのなら、と行ってみて、たまげてしまった。朽ち果てそうな木造平屋建ての家ばかり。どの家も、北の窓や外壁には、ビニールハウスの透明ビニールをびっしりと貼って、来た冬にそなえていた。

事実、当時の猿払村は、林業はだめ、漁業もだめ、石炭もだめ、観光はもとからだめ、という苦況に立っていたそうだ。村民はツメに火を灯すようなつましやかな生活をし、村の機能もマヒ状態に近かったらしい。村自体が消滅しそうだったともいう。

それが、ホタテの養殖で、大当たり！ 驚くなかれ、漁師さん一人当たりの平均年収が、いまでは4000万円。去年、村を訪ねてみたら、ひと昔まえの大貧乏はどこへやら……。白い壁の鉄筋コンクリート三階建ての豪邸が、あっちにも、こっちにも。出かせぎに行く若者は皆無、嫁不足なんかどこ吹く風、北海道の町や村ではまず見かけることのない高級車がひしめいていた。」

(村野雅義著、昭和61年刊)

ここで書かれているように、猿払の貧乏話は北海道では有名であったらしい。またホタテ養殖の大成功も、より一層有名である。



猿払村の中心街

もうひとつ「随想貧乏見学とその後」(かいびやく、昭和59年1月号)という農業関係者の文章が載った雑誌を見せていただいた。その話を要約してみる。

- ①昭和28年に猿払村見学に行った。
  - ②そのきっかけは、北海道で一番の稲作地帯であるA地区の農協理事から「どこか先進地でおもしろい処に連れて行く企画」をしてくれと、少し奢った態度で依頼されたことだった。
  - ③それに対してこの著者は「圃場整備・技術水準・経済安定度からみて、これ以上のところはないよ。珍しいものさがしは別だが」と答えた。「そこそこ珍しいければよい」といわれたので「内地に行かなくても身近に視察場所はあるよ」と言った。
  - ④「世の中の貧乏を見学しようではないか」と提案してみた。
  - ⑤そうして、当時新聞紙上に伝えられていた中から一番貧乏と目された日本最北端の猿払村の農業、農協、役場はどうだろう。必ず学ぶものがあるはずと、若干の説明を加えて提案した。
  - ⑥この見学は実施に移され、村役場、農協(職員が3人だけで、A地区某農協の支所にも及ばない規模)、酪農家をたずねた。この酪農家は老婆と夫婦、子供3人の家族で、子供が「いも拾い」をしていたので、「農繁期のための休校か」と質問したら、母親が「それは終わったが、うちは仕事が後れているので休ませている」とすまなそうに答えた。
  - ⑦このあと、もう一戸見学する予定であったが、誰かがこんな物見遊山の格好で行くのは憚られると言い出して、もう帰ろうとの声が変わった、夜の宴会も盛り上がり、反省の声が変わっていった。
- この後、猿払村は高度集約酪農地帯として脚光をあ

び、ホタテ貝漁業にいたっては先に述べた通りである。一方、稲作地帯として奮っていたA地帯は、貧乏がどんなものかを知って以来、自己に目覚めて農業、農協経営の放漫をいましめてすぐれた農協に成長している。この見学は過去を振り返り、原点に返って農業を見つめ直す、貴重な学習になったのである。

この文章の中に、昭和28年と56年を比較した表が出ているので紹介する。

表 村財政の比較推移 単位：千円

村名	数 量			人口一人当財政			
	昭28 A	昭56 B	B/A	昭28 A	昭56 B	B/A	
A地帯 猿 村	財政規模	37,000	1,711,000	46倍	5	407	76倍
	世帯数	1,150	4,200	0.6			
	人口	6,900人	3,500				
猿 村	財政規模	37,000	3,757,000	101	4	1,071	240
	世帯数	1,650	3,500	0.4			
	人口	8,300人					

表 漁業組織事業推移比較 単位：千円

漁協名	数 量			組合員1人当			
	昭28 A	昭57 B	B/A	昭28 A	昭57 B	B/A	
猿 村 漁 協	組合員	305人	120	0.4倍			倍
	自己資本	2,709	1,482,896	547	9	12,357	1,373
	固定資産	5,063	1,312,184	259	17	10,935	1,643
	貯金	10,816	6,173,789	570	36	50,448	1,429
	貸付金	23,545	2,389,533	101	77	19,913	2,586
	販売高	101,171	7,066,634	342	332	58,883	1,964
	購買高	20,640	782,652	774	68	6,522	866

「太平洋にコシマキだ」といわれながら、稚貝の大量放流へ)

「ホタテガイというのは養殖じゃないんです。これは天然の漁獲なんです」といわれて、なるほどと思ったが、「海にパラパラ稚貝を撒いて、本当にそこで獲れると思っていたんですか」とたずねたら、「そこなんですよ」といって、いろいろ説明を受けた。

この話は壮大な叙事詩であるので、というてここに紹介しきれない。かいつまんでポイントだけを並べることにする。

- ①ホタテガイは昭和17年には13,866トンという記録的な大量を示し、以後ニシンとともに猿払の経済を支えてきた。
- ②ところが、昭和29年からニシンが全く来なくなり、ホタテガイも1,000トン代に激減した。それまで漁師たちはニシンやホタテガイは湧いて出てくるもので獲れば獲るほど出てくるように思っていた。

※ここで少し私の体験を付け加える。昭和43年頃隠岐

島西郷町の振興計画を手伝っていた。それで問題となるのは漁業、とくに高級魚であるマツバガニであり、それに対応する底曳漁船であるが、それがほとんどなかった。「なぜないのか」という私の質問に対して、「兵庫県の香住が買いに来たので売った」という話だった。戦後の沿岸でいくらでも漁獲のあった時代のことかもしれないが、のどかな話であった。一方の香住は小さな町にもかかわらず、地元で金融機関を設立して、将来の漁業のために底曳の権利を買っていったのである。したがって、隠岐では、始まったばかりのカニカゴ漁のみであったので、マツバガニの将来について調べるために香住に行った。マツバガニも昭和30年代の終頃には資源問題が出ていたので、「マツバガニの将来はどうか」と底曳船主の1人に質問してみた。彼の答に私はびっくりした。「漁師というものは連帯心があるから、魚群を見つけるとすぐ仲間に無線で知らせる。だから漁船が多ければ多いほど大漁のチャンスが増える。これだけ機器が発達しとるからどこかで見つける。減ることなど考えられん」というものであった。つまり、カニは「湧いてくる」というのである。しかしそうはいかなかった。マツバガニは漁期・漁獲制限にもかかわらず元にはかえらない。この体験があったので、前田さんの説明に納得がいった。

- ③39年以降は、ニシン同様、「幻のホタテガイ」と言われるようになった。
- ④昭和38年前田さんが産業課長になったとき、水産係長から「前田さん、猿払の浜をよくするためには、根つき漁業がなければダメだ。ニシンやサンマのような漁業だったら、いついなくなるかわからないから」「まだ猿払の沖にはホタテガイがいるはずだ。これは毎年産卵したものが浮遊しているから、それを何らかのかたちでとって、人工的に増殖すれば昔のホタテガイの漁場ができる」といわれた。
- ⑤昭和40年に噴火湾（室蘭の西側の湾）一帯の養殖漁業の視察に行ったら、「しっぽのついていない」上に、漁師の手伝いのアルバイトにサラリーマン（学校の先生や鉄道員などの）奥さん方が来ているのを見てびっくりしてしまった。また、獲っているのは貝と海苔と昆布だけで、根つき漁業そのものであった。
- ⑥そこでも猿払と同じように浜の人はみんないなくな



ってしまったが、たった一人の普及員の方が自分の金で資材を買ってきたりしてこつこつと研究開発をしてきた。それに感動して、若い人が2人になり3人になって増えていき、現在の噴火湾のホタテ養殖に結びついたということを知り「きっと男に仕事というものは、こういうことだろう」と思って帰って来た。

- ⑦昭和41年以降、5万粒、33万粒、50万粒、100万粒と買ってきたホタテ稚貝を放流したが、「課長、そんなわずかばかりやったら太平洋に腰巻きですよ」と言われてしまった。少しでもやればそれだけ効果があるのではないかと思ってやったのだが、彼の言うとおりで太平洋に腰巻き程度では、あるかないかわからんことになる。
- ⑧それで水産試験場に行って場長に聞いてみると、最小規模は1000万粒だといわれた。大体研究者というもの、はっきり言わないものだが、場長は「1000万粒以上の大規模であれば大丈夫、資源は回復し母貝集団ができる」といった。
- ⑨1000万粒というと稚貝1粒で3円プラス運搬費、ヒトデなどの害的駆除、放流費など合計すると5~6円になる。5~6000万円いることになる。このため村が3年に限って20%の補助金を出し、さらに漁組の借入金については村が全額損失補償することにした。当然漁師である組合員も天引貯金をしたのである。
- ⑩その後も本当に貝が動かずに猿払の浜から漁獲できるのか、などについて紆余曲折はあるが、昭和49年の水揚げが1,674トンになった。計画の3倍の水揚げで、それは自然発生分も含まれていたのである。
- ⑪かくして10年後には4万トン近くの水揚げが得られるようになり、ホタテガイ王国が復活した。そして、昭和59年5月に発表される税務署の高額納税者番付(1000万以上の税金を納めた人)に稚内管内99人のうち猿払村に59人いることになった。
- ⑫昭和58年の村の決算で地方交付税が9億4400万円になっているが、上記の59人が納めた所得税が10億1558万円であった。

〈所得のないところに福祉はありえない、両方進めていきたいけれども、どうしてもできない場合は生産の方を先にやらなければならない〉

昭和45年「過疎地域振興特別措置法」ができた。こ

れに基づく過疎地域振興計画をつくるのだが、猿払村の振興構想は、「住民の福祉向上のためには、一つは産業振興による所得を増大すること。“所得のないところに福祉はありえない”を前提にして、他の一つは生活環境を改善することであるとし、しかもこの双方が並進することが望ましいけれども、とにかく低所得水準の克服を先決とする」と決めた。

産業振興の2本柱が「未利用の広大な土地資源を利用した酪農振興と、かつて繁栄した前漁の活用による浅海根付資源(ホタテガイ、昆布)の増養殖とし、さらに、それに加えてこれらの加工産業や特殊林産物の導入を図ることとした。

前項の⑨に書いた1000万粒放流とその後の加工場建設に対する資金手当については、過疎債によるところが大きく、その起債が認められるまでの苦労話は、理屈も含めて極めて面白いのだが、ここには書ききれない。一言だけ付け加えると、地域の所得を決めるのは漁業のような一次産業だけでなく、「①地域が外部から獲得する外貨の量を増やすこと、②外貨を地域内部でぐるぐる廻る回数を多くする」ことでなければならぬとしたこと。このあたり、何だか前田さんの若い頃が髣髴とする。

しかし、過疎振興の投資としては、これほど見事なことはないと思う。ハコモノづくりではなく、生産・所得をあげ続けられるシステム(放流して収穫する)を研究し、実証し、年々続けられるようになったのである。

17~8年前にある革新首長さんの誕生した町で、まちづくり計画の審議会に出ていたとき、ある高齢の委員が、先行のはっきりしない福祉施策の大ふるまいに対して「福祉福祉というけど、続かなきゃいかん、続く福祉をやれ」と言ったことがあった。私はそのとき以来、その言葉が耳から離れない。

この猿払村はまさに、「続く福祉」のもとである所得をもたらすシステムを確立したのである。

〈今後のことなど、私の感想〉

猿払村の若者定着はどうなっているかについて、北海道の友人から古い国勢調査データを送ってもらって整理してみた。男女とも110~120人/5歳階層という数字で安定しつつある。20~24歳までは減少するが、25~29歳で帰ってきて定着していることがうかがえる。もう少し増えることがあるかもしれないが、昔の9000

人の村人口を考えることはないと思う。当時は石炭で5000人ぐらい食べていたのであり、その基礎は失われてしまっている。

現在の村は私の想像していた以上に活気があり、明るいところであった。宿泊をたのんでもなかなか電話に出してくれないので、宿も1軒しかないさびしい村を想像していたが、ホテル風なもの、ペンション風なものなどたくさんあった。

行った日は稚内空港でレンタカーを借りてオホーツク沿岸を走ったが、好天で気分が良かった。しかし翌日は一転してオホーツクの海から横なぐりに叩きつける風に重心の低い車であるにもかかわらず、車が揺れ、冬の厳しさを思うことができた。宗谷の最北端へは立つことができず、車から出て売店で北を見ただけである。

もっと残念だったのは、宗谷-猿払村の間のオホーツク沿岸から、好天の日には樺太が見えるということを知ったときのことである。知っていれば前日に眼をこらしてみるのだったと思っている。

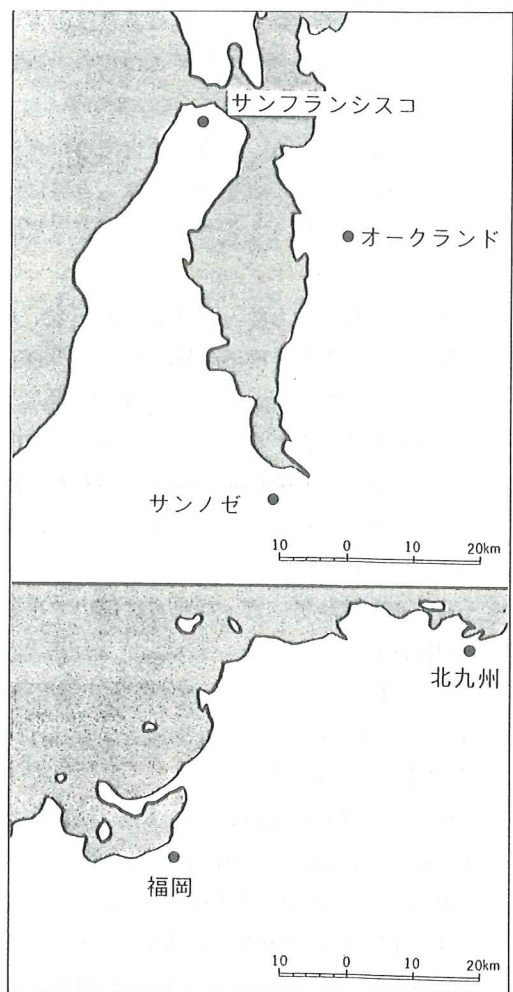
それにもまして誠に残念なことは、多くの話を紹介しきれないということと、香港・中国・アメリカなどにも輸出されていて、料理の華となっているホタテの貝柱の味についてふれられないことである。ホタテは干したもののほうがうまい。そして大きいものほど味がいい。一度お試しいただきたい。

なお、ホタテガイ顛末記について御関心のある方は、私のところにたくさんの資料があります。全部は困るので、文章でふれた〇〇についてという注文をいただいたらお送りすることにします。また現地に行ってみたい人は御紹介の労をとります。(糸乗 貞喜)

若者にカツを入れるには絶好の場所と思った  
アメリカ・シリコンバレー視察報告

●ゴールドラッシュからマルチメディアラッシュへ  
アメリカの西海岸カリフォルニアがゴールドラッシュに湧いたのは1849年のこと。それから150年近く経った今、カリフォルニアのシリコンバレーでは情報関連産業の発展が目覚ましく「マルチメディアラッシュ」という言葉が生まれている。

シリコンバレーの中心地はサンノゼ市(人口約76万



シリコンバレー帯と北部九州エリアの比較

人)。サンフランシスコ市との距離は約100で、2都市の間の谷間が連なるエリアに年間1億ドル以上の収益を挙げる企業が実に120社以上ある。しかも、その大半は技術やシステムに独自の特色をもつ中堅企業で、この10~20年の間に急速に成長したものである。

今、世界中の注目を集めているシリコンバレーを訪問する機会があったので、報告致します。

●チャンスがあればすぐに企業を起こす起業家精神  
「現代の二都物語」(アナリー・サクセニアン著、大前研一訳、絶版)をはじめシリコンバレーの成長の原因や過程について取り扱った本は多い。いずれもこの地域の「企業家精神」に触れている。ここで成功した企業の中には、20~30代の若い起業家が自分の発明品や技術をもってベンチャービジネスを起こしたり、企業の技術者がスピアウトして独立するなど「個人が自分のやりたいことを実現するため」に起こして成功を治めた企業が数多くある。





ヒューレットパッカード社の創立当時のガレージ

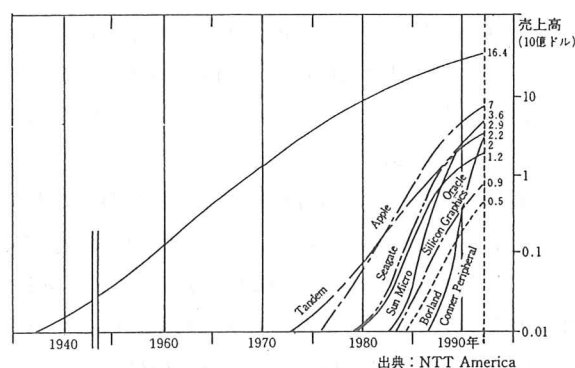
シリコンバレーの中心地に近いパロ・アルト市の住宅地の中に、今やコンピューター産業の大手となったヒューレット・パッカード社の発祥の地が今も保存されており、カリフォルニア州指定の観光史跡になっている。日本から視察に来たビジネスマンがよく立ち寄るといいますが、下宿のちっぽけなガレージでスタートした小さな会社は、ヒューレットとパッカードという2人のスタンフォード大学の大学院生が、自分の担当教官であった当時の工学部長フレッド・ターマン教授から励まされて数百ドルを借り、1937年に創立したものだ。

1940~50年代頃の初期のシリコンバレーで見られたような、大学の研究者や既に成功した企業が、新参者に対して研究室や資金を貸したりしてサポートする関係は今でも息づいている。例えばサン・マイクロシステムズという大手コンピューター会社があるが、サン・sunは「太陽」ではなく「スタンフォード・ユニバーシティ・ネットワーク」の略であって、もともと大学の研究室で生んだ発明品を外に持ち出して事業化に成功したものだ。それを大学のつながりを生かして成功している。

日本でも松下幸之助氏の起業精神などは有名であり、近年でも大手の企業を中心に企業内ベンチャーなどが奨励されるようになったが、最近の成功例がゴロゴロしており、人の動きが活発な地域では（圧倒的に失敗するケースの方が多いのだが）当然ながら地域産業全体に活気がある。

#### ●冒険して失敗しても何度でもチャレンジできる風土

シリコンバレーのベンチャーキャピタリストは「1割」の確立で当たれば上等と考えているという。当然、1割という高い確率は、的確な事業計画や技術的な発展性、市場優位性など、厳しい審査をパスしたベンチャー



シリコンバレーコンピュータ関連企業別売上高の年次推移

企業のみならず融資が与えられるためでもあるのだが、現地に在住している日本人技術者の話では「ここでは、ベンチャーで失敗しても何度でもやり直していい。大学に戻って技術を身につけて再びベンチャーで挑戦すればいいし、大体、成功した人は失敗した人よりも、より多く失敗しているのだから」という。

#### ●現在シリコンバレーでメジャーなIC?

現在、シリコンバレーで「IC」というと、集積回路のことではなく、Indian（インド人）とChinese（中国人）を指すそうである。ビジネスの世界に食い込もうとする若手研究者の中に彼らの姿が圧倒的に多いようである。民間企業の社内食堂はカフェテリア方式になっているのだが、どの会社でも中華料理（麺類や炒め物など）、インド料理（カレーや揚げ物など）のコーナーが一番人気があった。

最近では旧東側諸国で軍事研究などに従事していた優秀な研究者が、シリコンバレーに多く流入しており、彼らも自分たちの独自のネットワークをもって起業化に挑戦し、成功している人も多いという。

我々、九州人はアジアに向かって開かれた九州とかよく言っているが、実際に一番人が集まるのは、金と情報と産業が集まるところだなのということを実感した。

#### ●プリミティブな動機が活力の原点に

普通の人であれば「少しでも金持ちになりたい」「成功者になりたい」という欲をもっているだろう。

シリコンバレーでは、成功した人が成功者としての生活を満喫しながら、目標をもった仕事に励んでおり、若い挑戦者にとって、目標が非常に分かりやすいのだ。

この成功者には、一稼ぎしたあとは引退してのんびりするという思いはない。自分が起こした会社が安定すれば、すぐに新しい分野の会社を立ち上げていく。

シリコンバレーの技術者の一企業での平均在職年数は5年くらいともいわれるが、実力ある技術者が持っている個人の人的ネットワークは、会社という枠を越えて結びついている。

研究者や技術者が、自分の能力でのし上がることができる希望こそが、大学や会社という所属に関係なく、若い人たちのチャレンジ精神の原動力になっている。日本の大学が、文化系、理科系を問わず今後どうやって若い人を引きつけていくのか、あるいは逆に彼らが積極的に動く原動力は何なのか、考えておく価値はあると思う。



●最先端技術とマネジメントの両立を早くから学べる

シリコンバレーといえばスタンフォード大学が有名であるが、実際には公立・私立の数校の大学があって、いずれも電子工学やビジネススクール、有機化学などの特徴を生かして地域産業と結びついている。

大学の研究者が外で会社をつくるのが認められているため（特にスタンフォードでは研究者の外部活動を積極的に奨励している）、研究生や大学院生が自分の教官の手伝いをしながら、給料と実社会のビジネスを体験できる。これが卒業したあとの会社起こしに非常に役に立つそうである。生身のビジネスと先端技術の両立は、日本では国公立大学の場合、公務員法の規定などの問題があってなかなかクリアできないでいる。

近年、日本の大学では教官を外部の民間企業などから呼び込んで活性化を図ろうとする動きはあるが、今後は研究成果地域の社会への還元というベクトルが必要ではなかろうか。

●地域の経済とコミュニティの新しい関係づくり

 <p><b>KAY KANAZAWA, Ph.D.</b> LECTURER</p> <p>Department of Chemical Engineering Stauffer III Stanford University Stanford, CA 94305-5025</p> <p>TEL: (415) 723-7891 FAX: (415) 723-9780 NET: kanazawa@chemeng.stanford.edu</p>	<p>スタンフォード大学の研究者の名刺</p> <p>彼はIBMアルマデン・リサーチセンターの研究員でもあり、自分で起こした会社の名刺も持っていた (上:リサーチセンターの名刺、下:会社の名刺)</p>
 <p><b>KAY KANAZAWA, PhD</b> Lab Manager</p> <p>Department of Chemical Engineering Stauffer III Stanford University Stanford, CA 94305-5025 415/723-7891 FAX: 415/723-9780 kanazawa@chemeng.stanford.edu</p> <p>CENTER ON POLYMER INTERFACES AND MACROMOLECULAR ASSEMBLIES A Stanford • IBM Almaden • UC Davis Partnership</p>	

現在のシリコンバレーの問題点は、地域社会を巻き込んだ産業づくりといわれる。例えば、この地域のホワイトカラー労働者の賃金は全米でトップクラスという。しかし一方で、小中学校におけるパソコンの普及率は全米でも下位にランクされており、地域によっては軽犯罪の発生率が高く貧困層もいるなど、経済発展や産業技術とコミュニティの発展がアンバランスになっている。全米で1年間に投下されるベンチャーキャピタルの40%をこの地域が吸収して過熱気味であること、地価の上昇率が非常に高く戸建住宅は50~100百万円前後することなど、ハイテクバブルを懸念する声も出始めている。

このため、経済活動とコミュニティ（地域の教育や住宅、生活環境）の相互作用によって、地域の継続的発展につなげようとする、シビック・アントレプレナー（市民企業家）という人々の役割が重視されている。

商売で成功した人が、経済と地域コミュニティの橋渡しをすることをきっかけに、地域社会の教育（小中学校や労働者に対する）や生活環境、住みやすさを地域全体の問題として大事にしようというわけである。

この考えはジョイントベンチャー：シリコンバレー・ネットワーク（以下JV：SVNとする）という非営利法人組織で生み出された考えで、地域コミュニティの改善を含めた産業モデルの構築を目指そうとしている。現在は電子コミュニティや経済規制緩和、環境問題などを扱った11のプロジェクトが進行中であり、地域住民によるボランティアも盛んに行われている。

「貧しい地区の学校にPCを導入してネットワークでつなぎ、図書館と学校にインターネットを入れて地域福祉に役立てるべきだ」とある技術者が語ったように、大手の会社が古いモデルのコンピューターを寄付したり、コンピューター普及デーの日に全く商売気なしで地域の子供たちにレッスンをするなど、技術者達のボランティアへの取り組みも活発である。そういう訳でカリフォルニア州の8千の学校のうち、現在1千校以上まで導入が済んでいる。

このことは、いずれはコンピューターネットワークの普及に繋がって、長期的にビジネスにつながっていく地元産業界の市場戦略とともれるが、面白かったのは日本のある新聞社が普及デー取材したときの話で、「このイベントでどうやってカネをもうけたのか？」と聞くので、担当者がジョークで「Tシャツを渡したのだ」



と応えると（イベントの際に各参加企業が無料で配った）、記者が本気に受け取って「シリコンバレーのコンピュータ会社は今やTシャツで儲けている」という記事を日本で出したということだ。

この日本でもこのJV:SVNに触発されて、(株)スマートバレー・ジャパンの発会式があって注目されているが、アメリカ流のやり方をそのまま持ち込むのではなく、この国にあった活動を進めていくことに今後注目したい。

●日本の若者はもっと頑張らねばと素直に思った

今回の視察旅行で、最も印象的であったのは20～30代の若者の意欲的な活動がシリコンバレーを支えている姿である。この60年間、シリコンバレーでは若い人が産業の原動力になっている。今回、訪問した研究所や民間企業でも、将来の金の卵ともいえる人々が多くみられた。若い人が実際にチャンスを見つけて果敢に挑戦していく気っぶのよさに対して邪推抜きに感服する一方で、遥か離れたカリフォルニアの空の下、私は、故国・日本の行く末のことが少し心配になった。私自身は今年26才（フケているので、ひどい人は40才位にみてください）にもなるのだが、独立とか自立というものを改めて意識して生きないと「後悔する」と思った。日本では「〇〇が悪い」といって他人転嫁のその場しのぎで物事を解決してしまいがちであるが、自分の実力で解決していくことを若い人がやっていかないと日本の将来は暗い。

なお、誌面に失礼しますが、今回の視察でいろいろお世話になった科学ジャーナリストの飯沼和正氏、九州大学の大城桂作教授、松田泰治助教授、現地で丁寧な案内をして戴いたIBMアルマデン・リサーチ・センターの関元氏の各氏に改めてお礼申し上げます。

（尾崎 正利）

●イギリスで発祥したグラウンドワーク

グラウンドワークとは、元々1980年代にイギリスの農村地域で始まったもので、その趣旨は「住民、行政、企業のパートナーシップによる、地域での実践的な環境改善運動」である。また、環境デザイナーなどの専門スタッフを抱え、環境改善事業を推進する団体をグラウンドワークトラストといい、イギリス全土で45団体（1995年現在）が活動している。実は、今年中にイギリスのグラウンドワークを視察に行く予定なので、本場の報告は次回以降に行いたい。

日本ではイギリスのグラウンドワーク事業団と提携し、財団法人日本グラウンドワーク協会が1994年11月に発足している。

グラウンドワークには3つのキーワードが掲げられている。

- 対立からパートナーシップへ
- 行政依存から住民アクションへ
- 保護から環境マネジメントへ

何かと対立関係にあった住民、行政、企業が、協力関係を構築することが重要であること、住民の無関心や行政依存体質を自らのアクションによって地域づくりを進めていく姿勢が不可欠であること、環境の「保護」や「維持」だけでなく「回復」や「向上」のために環境マネジメントが重要であることなどがうたわれている。

●「花の和21」で福岡県は活動開始

福岡県では、県職員の大谷妙人氏の呼びかけにより、先の（財）日本グラウンドワーク協会の承認を得て、今年3月に「福岡県グラウンドワークトラスト研究会設立準備会」を発足した。メンバーは、県や市の職員、設計やコンサルタントなどの民間企業、一住民としてまちづくり活動をしている人たちなど10数名が集まった。

福岡県グラウンドワークトラスト準備中  
～「花の輪 人の和 地域の<sup>わ</sup>の<sup>り</sup>」

今、福岡県でグラウンドワークトラスト研究会を立ち上げようと準備会が進んでおり、実績づくりとしての花いっぱい運動を展開しようとしている。当社でその事務局を引き受けているので、現在までの経過や活動状況を報告したい。

花の苗の鉢上げ作業



当初準備会では、参加メンバーそれぞれのまちづくり活動などにあたっての問題や課題などを出し合って、ワークショップ形式で進めようとしていた。しかし、集まりや盛り上がりがいまひとつ(?)であったこともあるが、やはりここはグラウンドでワークる(造語)べきという意見が上がり、具体的な活動として花いっぱい運動をみんなで進めることにした。

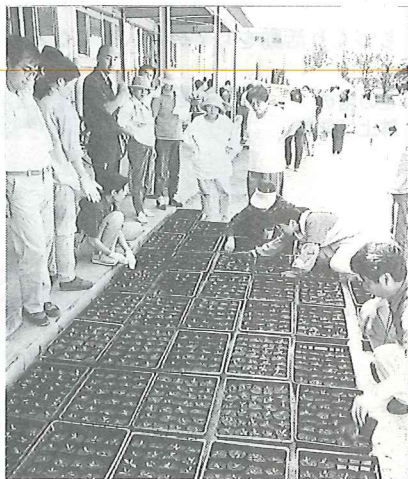
そして、地域で花いっぱい運動などを進めている人々を新たにメンバーに迎え入れ、活動のテーマを「花の輪、人の和、地域の<sup>ら</sup>～誰もが幸せに暮らしていける21世紀の地域社会を築くために」とし、特別に「福岡県グラウンドワークトラスト研究会 花の和21実行委員会」と銘打って新たな活動に入った。また、この活動を広くアピールするための鍵を握るメンバーとして、福岡に拠点を置くフォークシンガー岩切みきよしさんも参加することとなった。

●花の苗を鉢上げし、みんなで苗の里親になる

まずひとつ目のアクションとして、「花の輪をつくります～花の苗の里親集合」を行うが、それに先がけた9月21日(土)、県立粕屋高校で花の苗の鉢上げ作業を行った。集まったのは花の和21のメンバーを中心とするグループに加え、看護学校の学生、粕屋高校農業クラブの先生及び生徒たちなど約40人。

農業クラブの先生の指導を受けながら、ビニール製の黒い小さなポットに土を入れ、人差し指で穴をあけ、芽を出したばかりのダイアンサス(なでしこ)の苗をひとつずつ挿していく。次にそのポットをプラスチックのケースに並べ、水をまく。そうして1時間ほどで約1200鉢が出来上がった。

植え替えられた鉢は、参加したグループで分け合っ



ずらり出来ました  
1,000鉢以上

て持ち帰り、花の里親として育ててもらう。ちゃんと育つのはそのうちの半分くらいだそう。持ち帰った苗は、11月8日(金)にある「まなびピア'96」福岡会場で一般の人に配布するため、また持ってきてもらう。ただし、持ち帰った苗の一部は、ご褒美として個人でそのままもらってもいいことになっている。

●新聞への掲載は正確かつ慎重に

1回目の鉢上げの2週間後の10月5日(土)、「花の輪をつくります～花の苗の里親集合」として、粕屋高校において先日の続きの花の苗の鉢上げ、岩切みきよしコンサート、青空野菜市、そしてバーベキューが行われた。

このイベントについて、前日の新聞にお知らせとして掲載されたが、全体の集合時間(午前10時)しか書かれてなかったため、午後2時頃から始まる予定の青空野菜市を目当てに、地元の方たちが10時には集まってきた。何も用意できていないのを見て、おばさん達の半分くらいはぶつぶつ言いながら帰ってしまった。新聞って宣伝効果もあるけど、正確に慎重にやってもらわないと怖い部分もあるよなあ、と勉強した次第。

苗の鉢上げは、地元の住民の方にも一部参加していただいたが、今回はガーベラとキンギョソウで約1800鉢ができ、また参加者に花の里親として持ち帰ってもらった。

●テーマソングも発表

次に場所を体育館に移して、岩切みきよしコンサート。粕屋高校にはこのイベントを学校行事として取り上げてもらい、全校生徒、先生方と一緒に聴くことができた。

岩切氏はヤマハ・ポピュラーソングコンテスト(かの有名なポップコン)の優秀曲受賞や、世界歌謡祭の日



参加者みんなでバーベキュー



本代表として出場し入賞するなどの経歴を持つが、最近は今町村のイメージソングや阪神淡路大震災チャリティコンサートテーマソングを手掛けたり、知的障害者との交流を行うなど、音楽を通した幅広い社会的な活動にも力を入れている。

今回、我々花の和21の活動のテーマソングとして「花のある風景」、そして知的障害者などを含めみんなで幸せな社会をつくっていきましょうというメッセージを込めた「私を勇気づけて」の2曲を新曲として披露してくれた。「私を勇気づけて」には私も少し心を動かされたので、1フレーズだけ紹介したい。

あなたが生きている それだけでもう  
こんなに私を 勇気づけている

ちなみに、この2曲入りで近日中にCD化の予定になっているので是非御一聴頂きたい。5000枚は売らないと儲けにならないので。ところで花の種のおまけ付きにしたら、という私の案は採用されるだろうか。

#### ● “うそをつかない” 仲間たち

コンサートの後は運動場の一角でバーベキューと青空野菜市。野菜市は、高校の農業クラブで作ったトマト、ニラ、ぶどうなどと、九州日加協会から寄付で頂いたカナダ産のメープルシロップとメープルクッキー、安く仕入れた玄海産の鰯の開きが並んだ。シロップ、クッキー、鰯の売り上げ収益金は、花の和21の活動資金となる。全然足りないけど。

今回の活動には、心のバリアフリーも進めたいということで養護学校の生徒も何人か参加していた。岩切氏がコンサートの中で「知的障害者（と言っているかどうかも分からないが）は、うそをつかない人たち。うそをつくことを知らないとも言えるが、正直な人たちにふれあうと心が洗われる」と言っていたのが印象的だった。

花の和21の予定を含めた活動スケジュールは次のようになっている。

○ACT 1 10月5日(土)

「花の輪をつくります」～花の苗の里親集合

○ACT 2 10月25日(金)

「人の和を育てます」講演会&コンサート

アクロス福岡 円形ホール 18:00~20:00

講演会「何より人間 夢・希望・笑顔」

ホンダ太陽(株) 代表取締役専務 鈴木利幸氏

コンサート-岩切みきよし

○ACT 3 11月8日(金)

「地域の〇を育てます」 花の苗配布&コンサート  
まなびピア福岡'96 福岡会場 マリンメッセ福岡  
生涯学習見本市マナビー広場 13:00~17:00

○ACT 4 12月20日(金)

「花の輪 人の和 地域の〇」

リレートーク&コンサート (入場無料)

アクロス福岡 円形ホール 13:00~20:00

ACT4のあとに福岡県グラウンドワークトラスト研究会を正式に発足させる予定になっている。

今後もネットワークを広げていきたいので、参加希望の方、趣旨に賛同される方は事務局(当社)まで。

(伊藤 聡)

#### 地域データ散歩

#### 年齢階層でみた男女別の単身世帯

世帯の少人数化が進み、単身世帯も増加していることは周知のことと思われるが、単身世帯について年齢階層別に、特に65歳以上の高齢者を中心としてみたい。(データは平成2年国勢調査、グラフは総人口に対する比率)

#### ●女性の単身ピークは高齢者になってから

全体の傾向を、若い世代から順に年齢を追いかけると、まず進学や就職で親元を離れて独立していくのが10代後半から始まり24歳頃まで進む。そのあと40歳くらいまでに単身者は急激に減少する。これはほとんど結婚によるものと思われる。ここまでは傾向としては男女とも同じである。

40歳以降、男性はほぼ一定して単身者は減少していき、そのまま85歳以上まで至る。一方女性は再び増加し始め、70歳頃に2度目のピークを迎える。これは離婚、夫との死別などが主に考えられるが、離婚なら男性の単身も増加するはずなので、増加の原因としてはやはり死別が多いのではないかとと思われる。

しかし、連れ合いがいなくなったことで単身になるというのは、それまで子どもなどと一緒に暮らしていない、あるいは子どもが引き取ったり帰ってきたりしていないということと思われ、そのことの問題が大きいと考えられる。

それでは、県別の状況を見てみよう。

●比較的問題は少ないか？福岡県

福岡県は、単身世帯といえば学生などを含む若年世帯がかなりの割合を占めるので、比率で見ると高齢者の方はあまり深刻には見えない。しかし、母数の県人口は480万人で九州の他県と比べ、圧倒的に大きいため、実状としての高齢単身者は多いと推察される。ここでもやや女性の高齢単身者が全国よりも膨らんでいる。

この増えていく高齢単身者が、都心にいるのか農村にいいのかによって、福祉政策や住宅政策などの対応が変わってくると思われる。

●女性の高齢単身が急増する鹿児島県

鹿児島県は高齢単身者がかなり多い。特に女性では全体の単身者のうち65歳以上が51.3%と半数以上である。また高齢者のうちの単身者も約3割(29.6%)と他県に比べ割合が高い。

特に目立つのは、女性の40代から60代までの単身者の急増のしかたである。一番谷間の35~39歳の単身者は1,800人であるが、ピークとなる70~74歳(20~24歳よりも多い)には15,500人と8倍以上もの差がある。

前号まで連載していた「高齢者はなぜふるさとを離れたのか」でも触れたと思うが、鹿児島県は高齢者の移動が多く、県外に相当数出ていって一方、これだけ多くの高齢単身者がいる。いざというとき近くに誰かがいる様子見圏域が確立している。

●高齢単身はやや多めの長崎県

長崎県は鹿児島県に比べれば高齢単身者は少なめだが、それでも他県よりはやや高い。長崎県も鹿児島県と同じく離島が多いので、高齢者の状況も似てくるようにも思えるが、鹿児島ほど高齢単身者の問題は深刻ではないようだ。

●高齢単身の割合が低い佐賀県

佐賀県は全体的に単身者の割合が低い。人口が他県より少ないという以上に、単身者が少ない。単身になるような人は出ていってということかも知れないが。

全体の単身者が少ないために、そのうちの高齢者の割合は全体で29.1%、女性で41.3%と低くはないが、高齢者のうちの単身者を見ると、全体で8.9%、女性でも12.2%と他県よりずっと低い。

佐賀の男性はあまり死なない、などということではないと思うので、これは高齢者が夫婦以外の誰か(子どもを含む)と同居していることが多いと考えられる。

●単身の増減が少ない沖縄県

沖縄県は他県とやや傾向が違う。若い世代の単身者のピークがあまり高くなく、その後の減少幅も大きくない。特に男性の単身者がほとんど減らない。

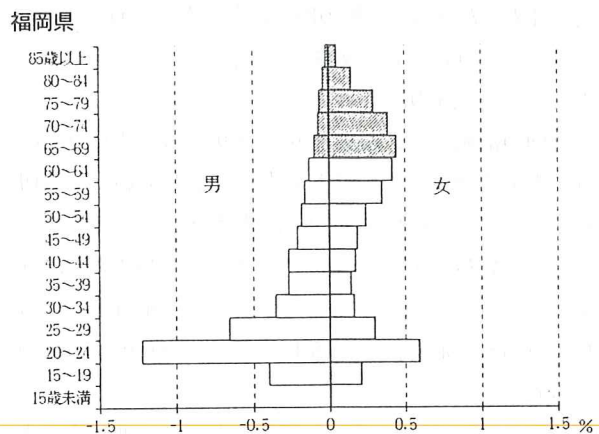
高齢化率自体が低いので、単身高齢者も少なく見えるが、高齢者のうちの単身の割合は福岡県よりも高く、沖縄県の高齢者は同居世帯が多いとは必ずしも言えないようである。

若い頃に明るい(であろう)未来を夢見て独立し単身になるのは、それなりに気分も悪くないだろうが、年をとって将来に不安を抱えながら単身になっていくというのは、明るいものとはいにくい。

年をとってはじめて単身になる女性が多くなるとも考えられる。子どもがあまり老後の面倒をみてくれないとすれば、男性はもう少し長生きできるようにがんばるか(がんばらない方が長生きするかも)、姉さん女房を推進するか。高齢恋愛をすすめるにも男性は少なすぎるし。何か楽しいことを考えなければ……。

(伊藤 聡)

年齢階級別単身世帯率 (H2)



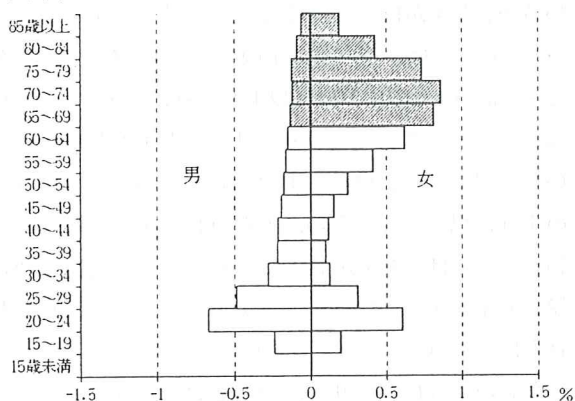
福岡県 単位:人、%

		合計	男	女
全	総数	4,811,050	2,303,487	2,507,563
	65歳以上	597,869	234,232	363,637
体	高齢者率	12.4	10.2	14.5
	総数	393,846	198,327	195,519
単	65歳以上	76,950	13,415	63,535
	高齢者率	19.5	6.8	32.5
高齢者の単身率		12.9	5.7	17.5

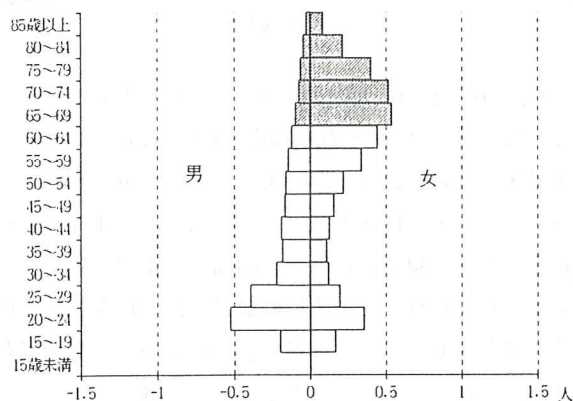


年齢階級別単身世帯率 (H2)

鹿児島県



長崎県



鹿児島県

単位:人、%

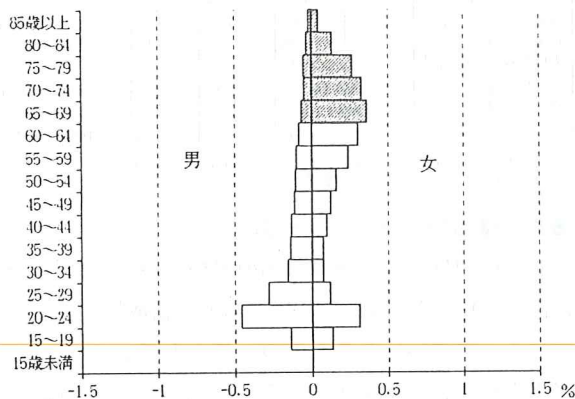
		合計	男	女
全	総数	1,797,824	842,474	955,350
	65歳以上	298,904	115,166	183,738
体	高齢者率	16.6	13.7	19.2
	総数	164,932	58,785	106,147
単	65歳以上	63,683	9,211	54,472
	高齢者率	38.6	15.7	51.3
高齢者の単身率		21.3	8.0	29.6

長崎県

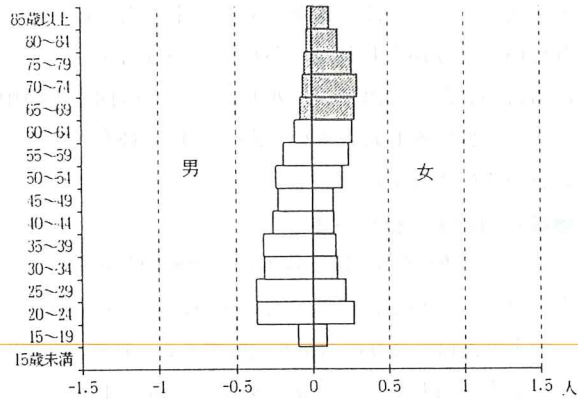
単位:人、%

		合計	男	女
全	総数	1,562,959	736,729	826,230
	65歳以上	228,991	88,805	140,186
体	高齢者率	14.7	12.1	17.0
	総数	102,351	40,664	61,687
単	65歳以上	32,215	4,918	27,297
	高齢者率	31.5	12.1	44.3
高齢者の単身率		14.1	5.5	19.5

佐賀県



沖縄県



佐賀県

単位:人、%

		合計	男	女
全	総数	877,851	414,673	463,178
	65歳以上	132,972	51,417	81,555
体	高齢者率	15.1	12.4	17.6
	総数	40,711	16,562	24,149
単	65歳以上	11,845	1,867	9,978
	高齢者率	29.1	11.3	41.3
高齢者の単身率		8.9	3.6	12.2

沖縄県

単位:人、%

		合計	男	女
全	総数	1,222,398	598,669	623,729
	65歳以上	121,082	44,588	76,494
体	高齢者率	9.9	7.4	12.3
	総数	70,166	33,815	36,351
単	65歳以上	16,929	3,119	13,810
	高齢者率	24.1	9.2	38.0
高齢者の単身率		14.0	7.0	18.1

## 人にやさしいだけでないヨーロッパ

～ 欧州鉄道視察から ～

9月の中旬、JR九州の「ソニックにちりん」のブルネル賞受賞を記念した鉄道視察旅行に参加し、ドーバー海峡トンネルを走る「ユーロスター」、パリからブリュッセルまでの「TGV」、さらにデンマーク、ドイツの国内鉄道などの見学に行った。国間、都市間を鉄道で移動していくのは、その土地の風景が徐々に変わっていくのでおもしろい。なぜ風景が異なるのか、雰囲気が変わるのか、事前にもっと勉強しておけば、もっと理解できただろうと反省した次第である。

## ●なだらかな丘陵地と耕作地帯と都市

前回の欧州視察（学研都市の調査）の時もそうだったが、欧州全体の印象として、山地が少なく、なだらかな丘陵地、耕作地や牧草地帯が目につく。しかし都市部に入ると、整然とした石造りの建築物、石畳と樹木の多さに驚く。特に、都心の繁華街の中にある低層部が店舗やオフィスでその上がアパートになっている建物は、職住近接そのものであり、夜になっても通りには人の気配があり、日本の夜のオフィス街のゴーストタウンのような雰囲気でないのは気分が良い。だからといって、安全な街という訳ではない。真っ昼間の繁華街で、たくさんの人が見ている中でも、ひたたくりにいつ会うかもしれないから気をつけるようにと何度も言われた。実際に、ベルリンで今回の同行者の中で貴重な体験をした人もいたが、総じて日本人がねらわれやすいようである。

## ●穀物自給率の低い日本

ここで、訪れた5カ国と日本との数値的な比較を見ると、ヨーロッパと日本の風景の違いが見えてくる。

国土の人口当たりの面積を比較すると、日本が3.02k m<sup>2</sup>/千人に対して、デンマーク8.32k m<sup>2</sup>/千人、フランス9.6k m<sup>2</sup>/千人など3倍近い面積である。小さな国であるベルギーでも3.11k m<sup>2</sup>/千人であり、日本は国土の割に人口が多いかが分かる。また、人口当たりの耕地面積をみると、デンマークは、4.93k m<sup>2</sup>/千人、実に日本の13倍以上の人口当たり耕地面積であり、次いでフランスが9倍、ベルギーでも2倍である。もともと耕地面積の少ない日本において、人口当たりの耕地面積も極端に少ない日本、これが何に影響してくる

かという穀物自給率である。日本の食糧の相当の部分は国外依存、輸入に頼っていることはよく知られているが、わずかに22%の穀物自給率となっている。一方、5カ国では、さすがに小国のベルギーは55%であるが、他の4カ国は100%以上であり、フランスは221%、デンマーク136%、イギリス、ドイツが106%という状況であり、自給率100%というのは、当たり前のように思えてならない。ちなみに、アジア地域の穀物自給率では、タイが161%、中国99%、韓国55%、総じて中近東方面は低いようであるが、それにしても日本はこれから一体どうなるのだろうか。ベルギーは、ご存じのように、ブリュッセルをヨーロッパの中心都市として、ヨーロッパ共同体の様々な機関が立地することによって（既に約1,250の機関が集まっているのである）、各国とのバランスをとりながら安定を獲得していくことになるのであろう。自給自足を確立するか、周辺とのバランスの中でうまく生きていくか、いずれかを選択せざるを得ない日本は、どちらの方向をとるべきか、はっきりさせる必要があるのではないだろうか。

人口等の比較

	日本	イギリス	デンマーク	ベルギー	ドイツ	フランス
人口 千人	125,034	57,649	5,170	9,967	79,365	57,527
日本100とした場合	100	46	4	8	63	46
経済活動人口	66,150	28,271	2,912	4,237	39,193	25,155
日本100とした場合	100	43	4	6	59	38
面積 1000km <sup>2</sup>	378	244	43	31	357	552
日本100とした場合	100	65	11	8	94	146
人口当り km <sup>2</sup> /千人	3.02	4.23	8.32	3.11	4.50	9.60
耕地面積 1000km <sup>2</sup>	45	66	25	8	119	193
日本100とした場合	100	146	56	17	264	426
人口当り km <sup>2</sup> /千人	0.36	1.14	4.93	0.79	1.50	3.35
穀物生産量	10,738	19,317	8,217	2,287	36,222	55,817
日本100とした場合	100	180	77	21	337	520
自給率	22	105	136	55	106	221

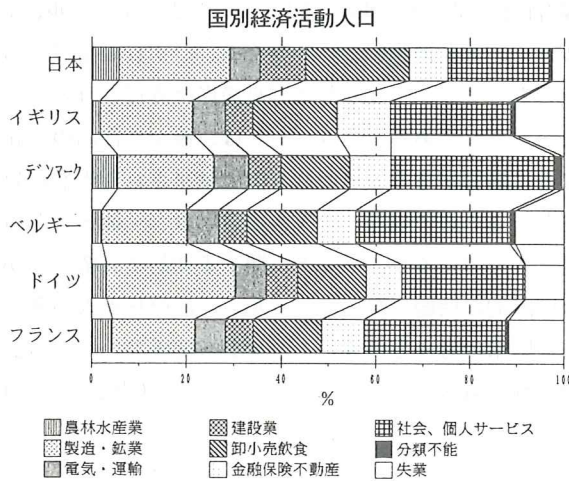
資料：「95/96世界国勢図解」「日本統計年鑑H7、8」等より作成  
1990～1993年の期間の数値

## ●人に優しいデンマークの街

右記の図は、今回訪ねた国の働いている人たちの経済活動人口（大体1991～92当時）の構成比率である。国によって違いはあるものの、日本とデンマークの失業者率に対して、他の4カ国の失業者率はかなり高い。また、社会、個人サービス業の比率では、デンマーク、ベルギーなどが高く、日本、イギリス、ドイツは低い。ベルギーの場合には、共同体機関関係の人たちがかなりの数入ってきているようであるが、デンマークの場合には、社会保障、福祉関係等のサービス従業者が多いのではないかと思う。

北欧の諸国は、福祉、社会保障に力を入れていることで知られ、日本の福祉環境づくりなどにもよく参考





にされているようである。その例をいくつかあげてみる。写真は、デンマークの視察の際に撮ったものであるが、都市部を走るバスは、乗降口が低く、間口も広く、車椅子やお年寄りが乗降しやすくなっている。ただし、車椅子などの場合には、一人では無理だが、回りにいる人が即座に手伝うのが常識となっている（写真1）。また、港付近の人が集まるところの地下にある公衆トイレの入口には、階段だけでなくエレベーターも設置されている（写真2）。

鉄道駅に行くと、プラットフォームへの乗降用に階段とエスカレータが付けられている（写真3）。さらに、電車のドアは、北欧でもあるため、全部を同時に開閉すると暖房効率が悪くなるため、人が乗り降りするのに必要なドアだけが開閉できるように、押しボタンで自動開閉できるようになっている（写真4）。日本でも北の方に行くとこういうシステムは取り入れられているようである。

歩行者の安全性の確保という点では、コペンハーゲンの郊外部の中層住宅地であるが、車道の両端に駐車帯があり、その外側に自転車道、さらに外側に歩道という道路構成になっている。この自転車道は、繁華街



写真1 低床型バス



写真2 地下公衆トイレのエレベーター

でも同じように設置されており、歩行者、車との事故を防止するためのものである（写真5）。また、ドイツでは、歩道の一部に、色によって区分された自転車専用スペースが設置されていた。

### ●自己責任、自己管理の違い？

人に優しい環境づくりというのは、社会的弱者に対するバリアフリー社会づくりの基盤と考えられるが、決して余計なことにまで、サービスをしているわけではない。その一つの例は、鉄道の改札機である。ユーロスターなどでは、自動改札機も設置してあったが、通常使う通勤・通学の鉄道線には、改札がなく、写真の

写真4 電車の手動式自動開閉ドア



写真3 プラットホームのエスカレーター







写真5 コペンハーゲン  
郊外の道路



写真6 パリの北駅の鉄道  
切符の無人改札機



写真7 ルーブル博物館の  
ミロのビーナス

ような改札機が置いてある(写真6)。この仕組みは、時間制限と移動する地区(ゾーン)によって、料金が決まっており、この改札機でチェックした時間、場所からある一定の時間内、あるいは目的地までのお金で切符を購入するという自己申告を信頼したシステムである。当然、無賃乗車も可能になるのだが、社内での検札が時々行われ、その際に違反していた場合には、給料の一ヶ月分くらいの罰金を取られる。約束、ルールを守ることが、自分の生活を守ることに直結していたヨーロッパならではの考え方のような気がする。

もう一つ、日本のシステムと決定的に違うこと、それは、博物館、美術館内での写真撮影である。使用中の宮殿とかプライバシー、警備上の問題のある施設の

場合には、さすがに撮影禁止であったが、ルーブル、オルセー、大英博物館、ペルガモン、いずれの施設においても、フラッシュなしの写真撮影は許可されているということである。フラッシュは、確かに作品の劣化などに影響があると思われるので禁止されて当然と思うが、この辺の規則、ルールの違いは、一体どこから生まれたのだろうか。ソフトに関する知的所有権などが今国際的な問題になっているが、一般の日本人の考え方と欧米の考え方の違いとあながち関係ないことも無いような気がした。(山辺 真一)

楽しく遊べる露天風呂と単に屋根のないだけの露天風呂

(兵庫県温泉町の露天風呂の流行るわけ)

私がお手伝いをした露天風呂が、「よく流行っている」と言っても、なかなか分かってもらえないので、露天風呂というものについて考えていることを少し書いてみたい。

●役所がやって黒字を出している事業

ここはリフレッシュパークというハイカラな名前をつけている。その内容は、25mの温水プールと、いわゆるどこにでもある浴槽がいくつかある男女別浴の風呂が平地部分にある。さらに斜面にそって、かなり大きい(眼をささない程度の広さがある)桶風呂、岩風呂、滝風呂、サウナがある。プールと露天風呂の部分は男女とも水着様のものをつけて混浴ということになっている。

私はこの企画段階でお手伝いをしたのだが、企画当初に県庁に一喝されたというエピソードがある。事業計画書に入場予想者数を5~6万人として出したところ「エラそうな計画を出すな、どうせ赤字を出すんだから見込み客を小さくしておけ」ということであった。それで3万人ということに修正して、起債などを認めてもらって建設したが、初年度から11万人が来た(入場料800円、水着貸賃は別)。

10年ぐらい経つが、補修費を起債償還した上で、少しは積立金があるはずである。

●屋外温泉遊楽広場と天井のないお風呂の違い

市町村から企画提案を求められたとき、露天風呂を入れておいても、ほとんど注目されなかったが、それは「天井のない風呂」として受け取られていたことに、



最近やっと気がついた。

この露天風呂ができて、私がなかなか行けなかったとき、この企画・事業化及び運営に最も大きい功績を持っている中村さん（当初は役場の係長だったか）が、「家では娘さんと一緒に風呂には入れんでしょう。ここなら一緒に入って遊べますよ」と言って誘ってくれた。ここの特色はこの言葉の中に表わされている。

- ①かなり広い斜面（幅30mぐらい、長さ80～100mぐらい、高低差15mぐらい）にゆったりと風呂が配置されている（図参照）。
- ②ひとつが直径10mぐらいの風呂が3つ、サウナがひとつある。
- ③この露天の受け皿のように、下部の平地に男女別浴の多様な浴槽をもって、洗う機能も備えた浴場がある。

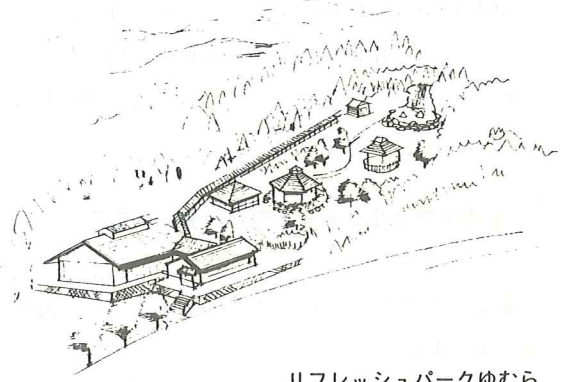
つまり、ここは天井のない浴場ではない。露天風呂が3～4カ所もあることによって、それらを巡りながらお湯とたわむれることができる場である。同じ浴槽に2～3度入るといように、気分を変えながら湯の中やかわらで遊ぶ時間が長くなる。こういうことは、いかに規模が大きくても、ひとつの露天風呂だけではなしえなかったと思う。水着姿の若い女性をみたり、周辺の緑を見たり、子供とたわむれたりする場合は、まさに心と身体の癒しの場である。温湯散策（あれこれの湯に入ったり歩いたりする）の場に近い雰囲気がある。

#### ●温泉も良かったし、努力もした

湯村温泉は「夢千代日記」の舞台となったところとして有名だが、以前から茹で卵がすぐできるぐらいの高温な湯として有名であった（中心の荒湯では96～98℃ぐらいの湯が湧いていて、卵が13分で茹であがる）。

このリフレッシュパークで使っている湯は別のところから湧出している60℃ぐらいのものだが、温度も湯量も豊富ということが、ゆったりした計画の支えになっている。

しかし成功の理由はこれだけではなく、この施設の完成当時から、運営を担当した中村支配人の努力も大きかった。彼は京阪神などの知っている事務所（例えば当所の京都・大阪事務所など）へパンフレットを送って（持って行って）受付あたりへ置かせてもらったり、PRを頼んだり、夜にはスナック（京都・大阪などで）にでも行ったら、パンフレットを置かせてもらって宣伝したりした。一見恥ずかしそうだが、かえって



リフレッシュパークゆむら

格好がよいのである。

こういうプロセスで、10年経っても10万人以上の客を集めている。夏休みには朝9時頃から10時の開場を待っている人がいる。

一度行ってみたい。ジャングル風呂もたわむれる場所ではあろうが、湯村の露天風呂（リフレッシュパーク）の開放感や緑の空気の爽快感には勝てない。天井がないだけではない。そこにはたくさんの癒しがある。さらに但馬牛のステーキハウス（町営）も一緒に経営していて味も楽しめます。

（糸乗 貞喜）

### 「目黒のサンマ」か「出水のいわし」

サンマは秋の味覚を代表する魚の一つであり、落語の「目黒のサンマ」を直ぐに思い出す。百科事典によるとサンマ漁業は約300年前紀州に始まり、やがて房総（現在の千葉県あたり）に伝わると記されていることから、目黒の殿様は房総から水揚げされるサンマを食べていたものと思われる。

目黒のサンマに劣らず、脂ののった「いわし」が鹿児島県出水市にありました。これは仕事の関係で出水市に泊まり、夜食事をしようと、ふらっとある料理屋に入って出くわしたものです。

鹿児島県の阿久根漁港あたりは昔から東シナ海で「いわし」が捕れ、鹿児島名物の「さつま揚げ」の材料としても使われている。私が食べた「いわし」は笠沙あたりで捕れたものと店のおかみさんは言っておりましたが、それにしても絶品の味でした。「いわし」以外に、食べて飲んで締めて一人2,500円と値段もリーズナブルでありました。

出水市は「麓」という武家集落があり、目黒ではサンマですが、出水の殿様は美味しい“いわし”を食べていたのかもしれない。(山田 龍雄)

会津大学マルチメディアセンターを見てきました

先日、会津大学マルチメディアセンターへ視察に行ってきました。

会津大学マルチメディアセンターは、マルチメディア技術の研究開発を行う9つのシステムを持っているのですが、その中から、おもしろかったものを紹介しようと思います。

マルチモーダルヒューマンインターフェイスシステムは、音声、手ぶり等を通して、人間と機械のコミュニケーションを様々な角度から研究するシステムです。ここでは、手袋を装着して手話でコンピュータに文字を入力したり、入力した文字を音声に変換する研究を行っています。実際に、文字から音声に変換するところを見ましたが、入力どおりの音はでるのですが、アクセントがないため、何を話しているのか聞き取ることができませんでした。(現在、ただの機械音から人間の言葉に近い音声に変換させることが課題となっているそうです。)

ヒューマンパフォーマンス解析システムは、人間の動作をコンピューター入力、解析しCG製作に活用したり、スポーツ技術の向上や医療等に役立っているシステムです。人の関節に器具をつけてコンピューターに動作を入力するのですが、これを使えば、武道家などの名人の技を永久に残すことも可能になるそうです。

人工世界構築システムは、大画面3面マルチスクリーンによる3D映像と立体音響効果で、迫力のある臨場感を体験できます。実際に、3D眼鏡をかけて体験しましたが、画面の人物の動き(ヒューマンパフォーマンス解析システムを導入)がリアルで遊園地で遊んでいる様な気分になりました。(七搦 かおり)

編集後記

先日、熊本大学の佐藤先生(リゾート論をやっておられる)にお会いしたとき、「ここは全員が社長さんだから」と言われて、大いに緊張しました。実態は、全員が「社長見習い心得」ぐらいでできる範囲内で「お客様本意」にやっついていこうと思っている程度です。

本号の中で、七搦が会津のことを書いていますが(P22)、これは地方シンクタンク協議会の研修会に参加したときの報告です。彼女はこの春やって来たニューフェイスですが、他社の人たちがいっぱい揃っているようなところに、一人で出張させたので「緊張のしっぱなしで……」という書き出しでこの文章を始めていました。その原稿を見て編集長としての小生はニヤリとしたのですが(枚数型責任主義の面白さとして)、編集割付された段階では、一番面白いところはカットされてしまいました。私も含めた「全員が見習い」ということを新入生も主張している証明であります。

もうひとつ気になった言葉は「続く」ということ。そのことは、「所得のないところに福祉はない」ということと「外貨を得て域内でぐるぐるまわす」につながる。誰が考えてもわかる「平凡で常識的」な言葉である。プランニングの原点は、「平凡と常識」というを、もう一度痛感させられた。(い)

よかネット NO.24 1996.11

(編集・発行)

(株)九州地域計画研究所

〒810 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F  
TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

(ネットワーク会社)

(株)地域計画建築研究所

本社 京都事務所	TEL 075-221-5132
大阪事務所	TEL 06-942-5732
名古屋事務所	TEL 052-962-1224
東京事務所	TEL 03-3226-9130